



TITLE:

社会研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

川村, 俊蔵; 河合, 雅雄; 東, 滋; 鈴木, 晃

CITATION:

川村, 俊蔵 ...[et al]. 社会研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1975, 4: 10-11

ISSUE DATE:

1975-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162611>

RIGHT:

かを検討した。48年度は、遅延反応の学習段階とニューロン活動、また光刺激に反応し、バー押しに先行するニューロンの検討を行なった。

総 説

- 1) 室伏靖子(1973): 動物の“ことば”—その行動的基礎。思想(8月号): 24—35。
- 2) 室伏靖子(1974): 脳の二重活動。人間・この未知なるもの(4)。pp. 58—61。ダイヤモンド・タイム社。

学 会 発 表

- 1) 強化スケジュールの検討—比率スケジュール
浅 野 俊 夫
日本心理学会第37回大会(1973)
- 2) ニホンザルの delayed matching to sample task
における学習行動—遅延時間の関数として。
井深允子・長谷川康夫・岩原信九郎
日本動物心理学会第33回大会(1973)
- 3) 遅延色合わせ課題における下部側頭回の部分破壊の
影響
井深允子・久保田競・岩井栄一
日本心理学会第37回大会(1973)
- 4) サルの自己刺激に関する研究—FR スケジュール
での反応パターン
小 嶋 祥 三
日本心理学会第37回大会(1973)

社会研究部門

川村俊蔵・河合雅雄
東 滋・鈴木 晃

研 究 概 要

- 1) ニホンザルの分布論的研究

川村俊蔵・東 滋

紀伊半島において、サルの分布を広域調査し、これまでの資料とあわせて、既知の分だけで 1,800km² 以上の連続分布域があることをつきとめ、さらに西へ連続することを推定した。そのほかいくつかの孤立した分布地がある。千葉徳爾共同研究員との協力のもとに、多角度からの分布論的な分析を行なっている。そのほか、鳥取県下における研究も行なった。

- 2) 野生ニホンザルの群れ社会の研究

1. 小豆島における経年変化の研究

川 村 俊 蔵

小豆島を10年の空白の後に再調査し、さまざまなヒューマン インパクトのもとで、群れがどのよう

に変化し、行動域がかわったか否かを調べた。

2. 小豆島K群および滑床A群における性行動の研究

川 村 俊 蔵

大島清を代表者とする霊長類の生殖生理に関する基礎的研究の一環として、上記の2つの群れについて、性行動の開始と終息の時期および個体間の性行動の頻度の推移について研究した。

3. ポピュレーション分布、および遊動と環境要因に関する研究

東 滋・足沢貞成¹⁾

4. 下北半島のニホンザルの社会生態学

東 滋

5. ニホンザルの個体群の維持・生活の維持におよぼす森林施業、その他の human impact の影響

東 滋

3, 4, 5 については年報第3巻6頁参照。

- 3) 海外調査に関するもの

1. グラダヒヒの社会・生態学的研究²⁾

河合雅雄・森梅代³⁾

エチオピアのセミエン地区でグラダヒヒの2ハード(105, 27)を個体識別し、精密な観察を行なった。ハードとワンマイルユニットの社会構造、社会関係(順位、グルーミング、血縁等)、性関係、性行動、性周期、コミュニケーション、社会的成長、アクティビティー、遊動生活について、質的・量的な研究を行なった。また、ハード間の関係を4ハードについて調べ、グラダヒヒ社会の全貌を把握した。

2. アフリカにおける霊長類の生態学的研究

鈴 木 晃

霊長類研究所特別事業の第2年度として、先年度に引き続き、昭和48年6月14日より昭和49年6月16日まで、ウガンダ・ケニア・タンザニアで霊長類の生態学的研究をおこなった。主としてウガンダのブドンゴの森において、チンパンジー、アビシニアコロブス、ブルーモンキー、アカオザル、サバンナモンキー、ヒヒの生態学的研究を行なった。

- 4) 自然保護に関する作業

川村俊蔵・東 滋

鈴鹿有料道路(継続)、大峯山系および熊野地方、東中国山地において、自然保護に関する基礎調査ならびに意見具申を行なった。

- 5) 野生獣類の保護と農林業への被害防除の基礎的研究

¹⁾ 教務補佐員

²⁾ 大沢秀行(生活史研究部門)、岩本俊孝(九大・理)との共同研究。

³⁾ 教務職員

中村克哉を代表とする上記研究において、ニホンザル・タヌキ・キツネの研究を行ない、農林業との関係および生態学的管理方法の考究を行なった。またアカネズミ・ヒメネズミについて同様な研究の準備を行なった。

IXth International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences, Chicago (1973).

変異研究部門

野沢 謙・江原昭善・和田一雄
西邨顕達・庄武孝義

論 文

- 1) Kawamura, S. (1973): Adaptation of Japanese large mammals to secondary forest. Proc. East Asian Regional Sem., Japan. Nat. Commit. IBP pp. 57-70.
- 2) Kawamura, S. (1973): The present situation of Japanese monkeys in their natural habitat. Proc. ICLA Asian Pacific Meet. Lab. Anim. Experim. Ani., vol. 22, suppl. pp. 453-459.
- 3) Kawai, M. and U. Mito (1973): Quantitative study of activity patterns and postures of Formosan monkeys by the radio-telemetrical technique. *Primates* 14: 179-194.

報告その他

- 1) 川村俊蔵(1973): 紀伊半島東部における哺乳類の分布について。野生獣類の保護と農林業への被害防除の基礎的研究, 昭和48年度研究報告 pp. 16-19。
- 2) 東滋(1974): 都井岬群における順位形成と群れおち。オスの生活史—ニホンザル地域個体群の研究 I (和田一雄・東滋・杉山幸丸編) pp. 12-21。霊長類研究所。
- 3) 東滋(1973): 御岳山地域の哺乳動物。自然環境保全地域候補地学術調査報告書, 御岳・能郷白山 pp. 21-30。岐阜県。

学 会 発 表

- 1) 森林植生の変化とニホンザル分布の歴史的変動
東 滋
哺乳類研究グループ研究会シンポジウム「哺乳類と自然保護」(1973)
- 2) 下北半島のニホンザルの生活と行動
東 滋
日本動物心理学会第33回大会シンポジウム (1973)
- 3) Origin of hominid huntings - from the perspective of primatology.

研究概要

1) ニホンザル集団の構造に関する数理的研究

野 沢 謙

ニホンザルにはその社会構造の単位として群れの存在が確認されている。群れの遺伝学的有効サイズ、群れの間の移出入率などは、ニホンザル集団の遺伝学的構造と動態を支配する重要なパラメーターである。従来から蓄積しているニホンザルの社会、生態学的知見を利用して、これまでにニホンザルの遺伝学的有効サイズを推定してきたが、2)のテーマとも密接な関係があるので、これと関連させて次のパラメーターを推定すべく目下資料収集中である。

2) サルの蛋白多型現象の探索と遺伝的変異性の定量化

野沢 謙・庄武孝義

遺伝的多型現象の存在を明らかにし、その頻度分布をもとにして、ニホンザルの集団の構造と動態を統計学的に解明せんとするもので、昨年度までにニホンザル35群約1,300頭分の資料を収集し、群ごとの遺伝子構成を明らかにして群間の遺伝的距離と地理的距離の関係からニホンザルの移動距離について考察した。また他の *Macaca* 属のサルについて種ごとの遺伝子構成を明らかにし、種間の遺伝的関係を明らかにすべく研究を開始した。これについては1974年度の日本遺伝学会で第一報が発表されるはずである。

3) ニホンザルの先天的四肢奇型への遺伝学的アプローチ

野沢 謙・庄武孝義

ニホンザルの高崎山、臥牛山、淡路島などの群に多発する四肢奇型が遺伝的支配を受けているか否かを明らかにすべく研究が続行されている。これまでは集団の奇型出現に関するセンサスから統計遺伝学的方法をもちいて分析を行ってきたが、今年度は淡路島野猿公苑の協力を得、交配実験を開始した。

4) 家畜化現象の集団遺伝学的研究

野沢 謙・庄武孝義

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝学的野外調査、および家畜と野生原種の遺伝的交流に関する調査によっ

¹⁾ 研修員

²⁾ 研修員